

【翻刻】

松代文化施設管理事務所（真田宝物館）所蔵
「真田幸弘遺稿和歌集」上・下（文書番号四―二―三）

平林 香織

はじめに

(一) 形式と内容

松代文化施設管理事務所（真田宝物館）所蔵の松代藩第六代藩主真田幸弘（元文五（一七四〇）―文化二二（一八一五））の遺稿和歌集（写本）二冊を翻刻する。

書誌は次のとおりである。

書型 中本 縦一九・二×横一三・二センチ（二冊共通）

表紙 紺色 亀甲花つなぎ紋地巻龍模様

題簽 無し

綴じ 袋綴

料紙 楮紙

全丁数 （上）五七丁 （下）六三丁

整理番号 文書の部第四―二―三号

跋文によると、この歌集は、松代藩土岩下佐源太（宝暦五年（一七五五）―天保六年（一八三五））、雅号・清酒^{きよさけ}が、主君幸弘の和歌のうち

寛政七年以降のものを幸弘没後に編集し筆録したものである。

幸弘が「年ことにをりにふれつゝよみすて給へる御歌」を佐源太が書きとめるならいとなっていたようだ。寛政七年以降の歌をとりまとめる前に幸弘が亡くなってしまい、その後公務のかたわら書き綴ったものだという。「仰せことさへ御記念となり」とある。亡き主君の折々の姿やことばを偲び、それらを幸弘の歌とともに長く記憶にとどめるために編集したのだろう。跋文末尾には「文化一三年卯月」の日付があり、「清酒謹言」と書かれる。幸弘は文化一二年（一八一五）に亡くなっているから、その八か月後である。

この歌集は真田文書を整理する際に作成されたと思われる畳紙（色画用紙）にくるまれて保管されている。そこには「幸弘公御筆御詠草寛政七年より文化二年まで」と墨書されているが、間違いである。岩下佐源太筆で、収められている歌は寛政七年（一七九五）から文化一二年（一八一四）までだ。上巻は寛政七年から文化元年までの一〇年間の二四三首、下巻は文化二年から同一二年までの一一年間の二六二首、合せて二二年間の五〇五首を収める。幸弘は寛政十年（一七九八）に家督^{ゆきだか}を幸専（明和七年（一七七〇）―文政一年（一八二八））、彦根藩主井伊直幸（四男）に譲っている。四六年に及ぶ幸弘の長い治世の最後のころから亡くなる直前までの歌集である。

すべての歌には詞書がある。それをもとに内容について簡単にまとめると、新年、子の日、七夕、重陽といった年中行事の折に詠まれた歌、梅・月・菊・初雪など四季の題がついた歌、賀や餞などの贈答歌、梅やしき・海晏寺・御殿山などを訪問した折の歌に大別することができる。大名や家臣、縁者、知人などの人名や、出かけた先などが記された詞書も多い。全体として、公的なものや社交的なものを中心に、四季折々に好みの題で詠んだ歌が並んでいるといえよう。

(二) 幸弘の文芸活動について

幸弘の文芸活動の全体像をおおまかに確認しておきたい。

まず、幸弘は、菊貫・象麿・白日庵・馬逸等多くの俳号を持つ俳人名として知られている。郡山藩主柳沢信鴻(享保九(一八二四)―寛政四(一七九二)、俳号・米翁、幸弘の叔父)の文芸サロンに出入りし、点取俳諧の指南を受けていたことが、柳沢信鴻『宴遊日記』(二三卷二六冊、信鴻致仕後の安永二年(一七七三)―天明五年(一七八五)までの日記)の記事からわかる。たくさんの江戸座の俳人とも交流があり、何人かを松代に招いてもいる。七十数名の大名と俳諧を通じた交友関係を持ち、大名・旗本・藩士らと巻いた百韻は伝来するものだけで九百巻に及ぶ。俳諧の座の主催者あるいは連衆だっただけでなく、点者として他の大名俳人らが巻いた巻に点数を付けていたこともわかっている。

一方で、幸弘は、俳諧活動だけではなく、和歌活動も行っていた。宝暦三年(一七五三・幸弘一三歳)ごろ賀茂真淵(元禄一〇(一六九七)―明和六(一七六九))に和歌の指導を受け、寛政五年(一七九三・幸弘五四歳)には和歌の宗匠日野資枝(元文二年(一七三二)―享和元年(一八〇一))に入門していた。

真田宝物館には幸弘の和歌関係書として、次のものが伝来する。

- ① 幸弘の和歌師匠ゆかの書簡、日野資枝の加点和歌懐紙
- ② 賀集
- ③ 年賀集
- ④ 詠草
- ⑤ 和歌俳諧紀行(画卷『青葉蔭』・紀行文『湘南紀行』)
- ⑥ 遺稿和歌集

①は真田家にとって重要なもので、ゆかが堂上の日野家と真田家との仲立ちをしていたことを示す。ゆか(游歌)についての詳細は不明である。

②の賀集の最初のもものは、松代の海津城につがいの鶴が飛来したことを瑞祥として編纂された『ともづる』二冊(天明七年(一七八七))である。ゆかが序文を寄せ、幸弘の叔父である松平定信(宝暦八年(一七五八)―文政二年(一八二九))の歌が巻頭に掲げられる。この年定信は老中首座に昇進している。そのほかは、将軍家斉の嫡男誕生にかかわる儀式で御篋刀役を務めた記念の『むらたけ』(寛政四年(一七九二))一冊と日野家への和歌入門記念の『はしだて』(寛政五年(一七九三))一冊である。松代藩における幸弘治世のめださを象徴するものといえる。

③の年賀集は、『にひ杖』一冊(幸弘四〇歳)、『わかみとり』一冊(五〇歳)、『千とせの寿詞』二冊(六〇歳・七〇歳)で、正室をはじめとする親族、大名、旗本、藩士とその縁者等が寄せた和歌、俳諧、漢詩を収める。『わかみとり』及び『千とせの寿詞』には付本として記念の贈答品目録も備わる。真田家の交遊関係の推移を知ることができる。

④の「詠草」には、年代ごとに整理されているものと、年代未詳のものがある。前者は、ゆかによると思われる添削の朱入れがある。寛政三年(一七九二)から寛政六年(一七九五)までの一二冊と、寛政七年(一七九六)から寛政十一年(一七九八)までの一〇冊に二分割され帙に納められる。内容の調査は今後の課題であるが、一見したところ、ことばの使い方や歌の内容、漢字表記にいたるまで細かな添削が行われ、点取和歌での得点が記されたものが多く、幸弘の歌道修練のようすをうかがうことができる。中には日野資枝の元に送ったという付箋が貼られ

ているものもある。年代未詳のものは、『花洛の草結』(三冊)及び『和歌詠草』(一冊)と題して長点がかけられた類題和歌集である。

⑤は幸弘が一〇年かけて幕府に願い出てようやく許可された文化九年(一八一二)の鎌倉・箱根への旅を記したものである。あらかじめ幕府へ提出した旅程表にはないがかねてよりの強い願いで西行の鳴立庵を訪問したということも書かれている。画卷は真景画と和歌・俳諧からなるが、幸弘自身が筆をとったものとお抱えの絵師小野正應・書家養田牛山に清書させたものがある。

⑥が今回翻刻するものである。

そのほか国文学研究資料館に寄託された真田家文書には、幸弘の和歌関係資料として、「幸弘公御自詠岡部衛士賀茂真淵点」、「和歌入門誓詞案」(寛政五癸丑年五月/日野家門入誓詞中書)の上書あり)、歌集『菊筵』がある。

また、真田宝物館と国文学研究資料館には歌をしたためた短冊も数千枚伝来し、賀集に寄せられた歌は短冊帖として美しく装丁されている。

以上の和歌資料は、幸弘がとくに人生の後半に、集中的に和歌活動に取り組んでいたことをものがたる。また、丁寧に保存され伝来されているようすから、真田家が藩主の歌や藩主に関わる歌を大切なものとして扱い、後世に伝えようとしていたことがうかがうことができる。

(三) 藩士岩下佐源太について

遺稿和歌集を編纂した岩下佐源太は、俳号を花足、太阜といひ、その

ほかに象山窟、双鶴庵の号を持つ。幸弘没後、第七代藩主幸専(前出)、第八代藩主行幸貴(寛政三年(一八五二)―嘉永五年(一八五二)、幸

専養子、松平定信次男)にも仕えた。『真田家中明細書』(史料館叢書8、東京大学出版会、昭和六一年三月)による幸弘存命中の彼の年譜は次のとおりである。

天明五巳・三・二一 依願御番入

天明八申・四・九 幸弘公御近習

寛政九巳・八・二 幸弘公御膳番御刀番兼

文化三寅・三・一五 家督

文化九申・一・二八 御役料拾五石

天明八年(一七八八)に幸弘の近習になったとき佐源太は三三歳、幸弘は四八歳である。以来三〇年間幸弘に仕えた。文化一二年(一八一五)八月三日に幸弘が没した後、左源太は町奉行となり、郡奉行を兼務、八代幸貴のときに隠居を願い出るが赦されず、御奏者格となり、文政一年(一八二九)側用人となったのち、翌年隠居している。『長野県歴史人物大事典』(郷土出版社、平成元年七月)によると、和歌俳諧のほか、茶道、陶芸もし、騎射にすぐれ、国学を本居宣長・加藤千蔭に問うたという。博学多才の人であったことがうかがわれる。編者に『歳々発句集』『双鶴庵随筆集』『松の陰』などがある。

佐源太は幸弘の点取俳諧に頻繁に一座していたことが、真田宝物館に一七〇冊ほど伝来する点取俳諧書『菊の分根』『菊島』からわかる。幸弘晩年の鎌倉・箱根への旅にも同行し、紀行には佐源太の詠んだ歌も書かれている。また、『松代町史』(大平喜間多編、昭和四年五月)には、天明期から文政期まで城下で和歌を講ずるための私塾双鶴堂を開いていたと記される。松代百人一首『松の百枝』を編集してもいる。つまり、佐源太は、藩主の文芸活動の一翼を担いつつ、藩の和歌指導者としても活躍していたことがわかる。

文政三年(一八三〇)、佐源太が七五歳で隠居するときに、藩主幸貴は佐源太の屋敷を訪れ、「いつまでも限りはあらじみなもののおなじ滋

野の秋ぞたのしき」という歌を贈ったという(矢羽勝幸編『長野県俳人名大辞典』郷土出版社、平成元年一〇月)。佐源太への幸貫の信頼と和歌による主従の交感を示すエピソードである。

(四) 幸弘遺稿和歌集の位置づけ

本和歌集の内容についての精査は今後の課題であるが、この歌集は藩主の和歌活動の一端を知るために重要な意味をもつと思われる。その見通しをおおまかに述べておきたい。

いうまでもなく、藩主や藩士の和歌活動は、徳川幕府との関係や、大名家の交遊に欠くことのできないものでもある。幸弘の場合は、堂上人日野資枝への入門をはたしたのが寛政五年(一七九四)五四歳と遅い。ゆかに和歌の添削指導を仰ぎながら盛んに和歌活動を展開していた時期は日野家入門以後である。

ところで、松平定信は、天明三年(一七八三)に幸弘の官位が従五位下から従四位下にあがった折のことを、「真田伊豆守四品になりしがこの物入は予に五六倍しけるぞとふ」(『宇下人言』)と書いている。二人は同じ年に従四位に昇進している。真田宝物館には、幸弘昇進の際には七千両もの費用がかかったと書かれた文書も伝来する。また定信の『花月日記』には、幸弘が真田家と浜松藩井上家との縁組の仲介役を熱心に定信に頼んでいるようすが記される。幸弘は政治力のある甥を藩政のよりどころとしていた側面がある。

そういう意味で幸弘の和歌活動も、政治的な手段であったとする見方もあるかもしれない。確かに、俳諧一筋だった幸弘が、定信の影響で歌を詠むことに熱心になったということはあるだろう。しかし、果して幸弘は単に政治の道具としてのみ歌を詠んでいたのだろうか。佐源太によるこの遺稿集をみると、そうではないように思える。幸弘にとつては歌

を詠むことは人と結びつくことだったのでないか。遺稿集のなかで、幸弘は、賀や回忌、あるいは餞の記念として歌を詠み、与え、また、請われている。四季折々の歌はいずれも実景を詠んだもので、月見をしたり、梅見をしたり、家臣が丹精した菊を愛でたりしている。自然詠でありながら、景物の背後に誰かの息吹を感じる歌が多い。そして、歌題にはなんらかの傾向性があるようにも思われる。菊を詠んだ歌が抜きんでて多く、俳号「菊貫」と関係があるのかもしれない。

朱入りの「詠草」は藩主の歌作りの実態を示す資料として貴重である。それらは屋敷の中で自室に籠ってひとり歌作に励む勤勉な藩主の姿を伝える。また、歌の師であるゆかや日野資枝に対する真摯な学びの態度を示してもいる。それに対して、遺稿集に収められた歌は、特定の場所で詠まれたものや、特定の人に対して詠まれたものである。そして、歌を詠む幸弘の傍らには佐源太がいる。そういう意味で、これは外に開かれた歌集といえる。わたしたちは佐源太がすぐそばで見ているのと同じ歌を詠む藩主の姿を目の当たりにすることができる。

遺稿集の年代は、「詠草」の年代と一部重なる。今後、同じ歌があるかどうか、あるいは添削されているかどうか、といった調査も行わなければならぬだろう。祝賀集や賀集との比較考察も含め、詞書に書かれた人名地名の考証、歌題や表現についての考察もこれからの課題である。さらに、藩主の文芸活動を支え、藩全体の文化を豊かで息の長いものとして展開させた藩士の文事という視点で、幸弘以下真田家三代に仕えた佐源太の業績をたどっていく必要があるだろう。

凡例

翻刻にあたって、次のような処置を施した。

- 一、和歌は二行書きだが、翻刻では一行書きとした。
- 一、年号は一字下げ、詞書は二字下げとした。
- 一、旧字及び異体字は、通行の新字に改めた。
- 一、文字の清濁は原文通りとした。
- 一、割注になつてゐる箇所には、〈 〉を付けた。
- 一、丁の終わりの文字のあとに〈 〉を付けた。

【翻刻】

【本文】

(上巻)

寛政七年乙卯

年内立春

暮てゆく年のころたにたつ春の色を見せたる梅の一もと

初春

去年に見し空も一夜にあら玉の光やはらく春はきにけり
ふるとしの一よは明て鳥かなく吾妻の春の四方のゆたけき
けさははや霞のころも立そめて」春きにけらし空の長閑さ

はつ初見鶴

明わたる春日のとかにうちむかふ中空高き友つるのこゑ

東の日叡に花を見る

咲尽す匂ひめかれすななき日も」たゞまくおしき花の下陰

御殿山

佐保姫の袖の霞をしるへにて磯山さくら分つゝそ見る

六十年賀

老らくのよはひ契てしめのうちに」十返るまつの花も見るらん

契れ猶よはひの末もちとせへん松もろともに春を榮えて

米賀 島田重三郎

筭え来し老の齡のたくひなみ八十島かけて幾千世のはる」
ちきりおく老せぬやとのたま椿八千代の春やともに榮えむ
齡猶かたきためしはをとめ子かなつとも尽ぬ岩尾ならまし

十五夜

鏡とも心にかけてうつしみむ」世にくもりなき月のひかりを
露むすふ尾はなに月のかけみちてはてなくてらすむさし野ゝ原
君か代の最中の月のひかりこそ幾秋消るかゝみなるらん

十三夜

名にしおふ望にをとらす照添てふたよの月の影そさやけき
長月のつきのかつらの長き夜もむかふにあかすひかりくまなき
世にたくひあらしに空の吹晴てさやけてらす長月のかけ」
望に見し空もいつしか転りきてふたゝひ消るなか月の影
めかれしな惜むにあかて長夜もふたゝひ照す月のひかりは
隈もなく光を添て玉くしけふたゝひてらす長月の空」
最中にもをとりやはする長月の月消わたる空のけはひは
をしむそよ待えし空に隈もなく夜を長月のつきの光りは

菊

咲匂ふはなの数くめくりつゝ」千とせを契るきくの盃
いく秋の菊の下水くみて猶ちきり重ねん山路わけつゝ

海晏寺

散としも名はくちせしな山もとに世をふるてらの庭のみちは」
見るかひもあらしにいたく落敷て色なつかしき寺のみち葉

歳暮

なすわさのたかきいやしきおし並て春まつとしの暮に賑ふ
かそへ来し日数もいつらふと暮て」まちかき春そおとろかれぬる

寛政八年丙辰

はるのはしめのうた

空もはや霞のころもたち初て「よもうらゝかに春はきにけり
めなれてし日影もさすかたちかへる春のしるしの光りをそゝふ
初春の空もしつけき朝日かけくもらぬ御代の鏡とを見む

む月末雪の降けるに」

梅花ちりし名残をさらに今それと見する庭の淡雪

さとに咲花とこそみれ春も漸日かすふるえの梅のしら雪

旧直か故郷に帰るにあたふ

古さとの春もゆたかにきつゝゆく」花のにしきの旅の衣手

七十賀 石川新八母

たち返りいく世の齢かさぬらん八十こす川の浪のまに／＼

十五夜

うち向ふ心もすめる秋のよの」月にやとかす庭の池水

待えたる月にめてゝそ長き夜も明日わひしきものと知ぬる

幾めぐり秋の最中もかはらしな隈なくてはらす月のみかけは

重陽一

円あしてけふ波菊の杯に猶いく千よの秋やかさねむ

菊

契おきて猶いく秋もあかすみむ圃ふま垣の菊の千とせを

めもあやないつれをそれとわきてみん」さきかさねたる菊のまかきは

こきうすき色をましへて花の上におきまとはせる菊のしら露

万鱗法師か庭にて

浅からぬめくみの露に咲いてゝ色かことなる菊のいくもと」

見てもみもつもる齢そしられぬるふりせす匂ふ菊の千くさに

残菊

咲はなの霜にふりせて千世ふへきいろをみきりのきくのいくむら
露霜とむすひかへてもさくきくの」老せず匂ふいろそことなる

十三夜

長月のなかき夜としもおもはれすあかぬこゝろにむかふ月かけ
最中より後の日かすをかさねきて衣手寒しなか月の影」

神無月清酒かふるさとへ帰るにあたふ

空寒みおもひこそやれゆく向も名におふ雪のふるさとの旅

歳暮

かそへ来て残りすくなき日かすにそ」暮ゆくとしのをしまれにける
世の人の心は春にいそかれてなすわさしけき年そ賑ふ

諸ひとの心をはなに十かへりの松たてわたし春や待らむ」

寛政九年丁巳

春のはしめに

よつの海しつけくあけてたくひなみたちかへりぬる春のゆたけさ

けさははや霞の衣たちそめて」そらものとかに春はきにけり

あふき見る日かけのとかに明初てうこかぬ御代の春やかさねん

明初て日かけもしるくけさはやはるをみとりの空の長閑さ

空もけさ春やきぬると遠近に」かすみのころも立そめにけり

初春見鶴

仰みん神代のまゝにたつはるの空にのとけき友つるのこゑ

八十年賀 立田草風

栄ゆく末やいく千世老のなみ」八十島かけてたち重ぬらん

恩田民祇の庭に人麿の大神を祭りて歌集るよし願ひにまかせて寄道祝

といふ心を

かしこしな世々にさかゆる言の葉の道を守りの神のめくみは」

庭梅春久 松平左京父八十年賀

色もかも猶ふりせしなくはるをちきるみきりの梅の盛は

良夜

秋津洲の秋の最中の名に高き空にてりそふ月そくならぬ」

十五夜組題の内月前埜

秋の野の草葉にむすふ露にまつこよひの月のかけやみつらむ

重陽

円ゐしてけふくみかはすきくの酒に千とせいの秋やちきりおかまし」

三夜

曇りなき御代にあえつゝ玉くしけふたゝひてらす長月の空

万鱗法師か与に任せて

咲出てふり行秋にうつろはぬ花をみきりの菊のいくもと」

露霜のふりぬる寺にさく菊の猶うつろはぬ花はめかれす

霜月なかは道柱法師の故郷に帰るうまのはなむけに又來ん春は必來よ

かしなといひて

しはしたにわかるゝしるし旅衣」たちかり來ん春はちきれと

旅衣日数もともにかさねゆく遠かたさそな宵のふるさと

八十年賀 成瀬隼人卿

深みとりいく世かさねん陰も尚かねてそしるきやとの呉竹」

歳暮

かそへては惜まれにけり一年も間遠く春をむかふ日数に

寛政十年戊午」

六十年賀 松平左京大夫殿

末速き常はの松のかけしめて君かよはひも十かへりの花

契おきて君か齡のむそちより千代の栄えを松のことは

小松曳の洲浜に添て」

ちとせとも何かゝきらん子日する野への小まつも君にひかれて

睦月廿一日六十年のことほきとて人／＼の歌に詩におくられける其題

は日野一位殿に与侍て檐松有喜色と」いふこゝろをよみて給はりける

に

陰高み軒はに仰く松の枝はともなふ千代の色やみすらむ

七十年賀 窪田惣右衛門

深みとり稀なる春に相おひの」松のちとせや猶重ぬらむ

松契遐年 篠原玄意母

老らくのともわかえて十返りの花まつかゝるにちきる幾春

人の六十年の賀に

一しほの色ます春に契おきて」千よの栄えを松陰のやと

人の七十年の賀に竹契遐年といふ心を

呉竹のふりせぬ色をちきりにてともに栄えむ幾ちよの陰

遐遠 小笠原佐渡守殿室一周」

めぐり来て咲そふ花の陰を猶かへらぬ去年や思ひ出らん

遐遠 植村駿河守殿室勸進古松平主殿頭七回

巡り来て袖も露けく影やとる月にむかしや猶しのふらむ

良夜」

君か代のますみのかゝみかけ清くむかふ最中の秋のよのつき

よつの海静なる世にすむ月はくもらぬ御代の鏡なりけり

くまなさは見ぬもろこしの空までもおもひやたてぬ望月の影」

十三夜

長月のつきのかつらのもみちせる光りやこよひ花と散らん

なとてかく長き夜ながら長月のをしむかひなく山に入らむ

道柱法師は過し皐月計に」此吾妻に來りぬされは朝にはかなたこなた

に伴ひき夕にはともし火のもとにこしかたゆく末をかたり合つゝ老の

徒然をなくさむる友とたのめしを月日の関守なくしら雪の」ふるさと

に歸らまほしきよしをいふに名残尽せず引とゝめまほしけれと日に増

て寒けさの添へかめれば道の事うしろめたういたはり思ふ物からうへ
なひ侍りぬやかて馬のはな」むけに又来ん春をちきりつゝみしかき筆
に色なきことの葉をかいつけておくる

をしまれし日数もいつかふる里にけふたちかへる旅の衣手
はる／＼と小春の旅の首途に」春をちきりの春そ待るゝ

杉羽馬場広人か故郷に帰るにあたふ
ふるさとの名も十返りの松しろに花さく春を愛にこそまで」

寛政十一己未

寄松祝 秋田山城守殿五十年賀

深みとり若枝もことにさしそひてつきぬ栄えの松のいく千世

良夜」

うつる世に名たゝるけふの月かけもみつ汐かまのむかしかはらし
待付しけふのこよひの中そらにはてなく向ふむさし野ゝ月
名にしおふ秋の中の中空はれてたくひまれなる望月の影」

八十年賀 平林惇篤

老の浪八十島かけて末遠く千世の齢や立かさぬらむ
仙人の其ためしをもきくの葉に書たる筆や千世も尽せし

庭菊」

庭の面に山路のきくを移し植ていく秋花の老せぬを見ん
ませの内に花の数／＼おく露の玉もてかさる庭のしらきく

夕菊

七重八重夕くれかけて咲そひし」色こそあかね花のしら菊
夕間暮玉をつらねてませの内に光を添る菊の上の露

菊露

露深み色をましへてませの内に咲みたれたるきくのいくもと」
咲きくの朝な夕なの露にしもふりせぬ花の色をこそゝへ

寄菊恋

うつりゆく心の色はしらきくの露わすられぬ人の俤
しら菊の露ならねともうき中の」袖のなみたや澗と成らん

寄菊祝

咲しよりふりせぬ花の色見えて秋もいく秋匂ふしら菊

秋毎に千よのことの葉しけりつゝ尽せぬやとの菊のしら露」
移し植て山路の菊のかもしれないく千歳の秋や色に見すらん

庭のきくみに

咲しより色香ふりせず此やとのちとせの末もしらきくの花
仙人のむかしをいまにあとたらず」咲つゝ菊のあきもいく秋
千よ経へきためしときくの秋ことに老せず匂ふ花のいくもと
朝な夕な露のめくみに色添てかゝる盛をみするむらきく
うつしうゑて栄ゆく末もいちしるし」千とせふるてふ菊の色香は

かたはらのものとも去年の秋飼てしすゝむしの果を壺めくものに
まうけおきてしよしことしかへりてあまた出たりされはかなた」こ
なたにわかちつかはして又来ん秋のまうけにみつよつ二つ残し置

てしかやをら秋の更行まゝに声いとわひし
むさし野の草にやつれぬ鈴虫もふけゆく秋にこゑかるゝなり」

十三夜

名にしおふ最中の後も空に又よも長月の影のさやけさ

年のはてに

家／＼に千歳のためしいとなみて春まつ門の暮そゆたけき」

寛政十二年庚申

春のはしめに

去年見てし空も夜のまにあら玉の光り和らく春はきにけり
けさははや霞の衣たちそめて」春きにけらし四方の長閑さ

ふる年の一よは明て鳥がなくあつまの春の光りゆたけき

年賀 松平右京大夫殿

契置て花さく松に相おひのいく十かへりの齡かそへむ」

人の年賀に

けふよりは言はの春も十かへりの松のよはひをちきり重ねよ
契れ猶よろつ世かけて深みとりふりせぬ松に尽ぬよはひを

道柱法師より梅の鉢植を」おくりぬるに

浅からぬ心の花の色見えて猶咲そはむ梅の一もと

寄霞述懐

はる／＼と霞る空に立きえしむかしの人をしのふころかな」

ほととぎす

此ゆふへまつかひ有てほととぎすはつこゑもらす雲の遠かた

七夕

妹とせの契もふかきあまの河末のあふ瀬の秋もいくあき」

天の川いく秋かけてたなはたのちきりかさねんかさゝきの橋

秋こよひ天の羽衣まれにきてうらなくちきる星合の空

一とせのまくらのちりや払ふらんこよひあふよの天の川かせ」

野辺もけふ星の逢夜の秋にあひて花のひもとく千くさもゝくさ

庭萩

星露のひかりを添て庭の面に咲みたれたる萩のいくもと

咲添し花すり衣きつゝみる」色そめかれぬ秋はぎのはな

月

いく秋もこゝろの友とすむやとは月にあくへき所なりけり

君か代の千秋にすめる高き屋は民のかまとも月にこそみめ」

かきりなき光を添てむさし野に名も高とのゝ秋のよの月

初雁

雁かねのゆくゑはそれとしら雲に声のみもるゝ遠かたの空

庭菊」

ちよ経へきためしをこゝにみきりなるさかりのきくの花そめかれぬ

色もかも八ちよかさねて咲出る庭のしら菊あえものにせん

上やしきにて

咲添る菊に千とせのかけしめて」さかゆくやとの庭のむら菊

池田浪江か願にまかせて

咲出てふり行秋にうつろはぬ花をみきりの菊のいくもと

十三夜

も中より後の日かすもかさねきて」衣手さむし長月のかけ

隈もなく向ふ名残に玉くしけふた夜の月の影をしそ思ふ

長月のななき夜としも思はれてあかぬ心をしたふ影ゆゑ

暮秋懐旧」

ひととせにくれゆく秋のめぐり来てむかしをしのふ袖の露けさ

去年の秋を思ひ出れば衣手に夕の露や置添るらむ

もみち葉の過こし秋の名残をやしのふたもとの露けかるらん」

暮てゆく秋にむかしのおもかけをぬるゝたもとの露に問まし

物おもふ袖に露こそおきそはれ去年の夕への秋をこひては

暁初雪を見て

しらむよのそれかあらぬか庭の面に」折めつらしく降るしらゆき

時雨にはそめし梢の色かへて白たへ寒き庭のはつ雪

五十年賀 竹内長林

かそへ来しよはひに猶や声そへて八千代かさねん鶴の毛衣」

七十年賀 うら瀬

未遠き契りをこめてつくつゑに千とせの坂も猶こえぬへし

年内立春

としのうちに春はきにけりまのあたり咲そふ梅の花の色香に」

としのくれ

並て世のたかきいやしき隔なくはるまつ年の暮そ賑ふ

享和元年辛酉

六十年賀 河原舎人

千よ経へきためしを松に契置てよはひかさぬる春もいくはる
契おきて猶いくはるもみとりなる松をちとせの友とみるらん
人の六十年の賀に

末遠き松に契て老らくの猶いく千世もよはひかさねん

深みとり若枝もことにさし添て栄え尽せぬ千よの松かえ

七夕

ゆき合のはまの真砂の数／＼に「ちきりおくらん星のかね言
稀にあふ秋のこよひやたなはたの雲のころもてかさねきぬらん
一とせにひと夜なからも織女の千秋かはらぬ契なりけり

松契立春 飛鳥井殿出題／松平遠江守殿耳順賀

千世経へき齡を松にちきり置て猶みとりそふ春やかさねん

齡をは松の千歳にちきり置て猶いくはるの栄えみすらん

幾春も葉かへぬ松の色にしもちきり尽せぬ齡ならまし

十三夜

名にめてゝてり増らなん長月のかたふく影をゝしむ物から
もみち葉も猶てり添て一しほのかけもさやけき長つきの空

享和二年壬戌

む月はしめ雪の降けるに

さりけなききのふの空のよのまにも降かはりたる春のしら雪
梢にはまたきに花のさくかとも「あやまたれぬる春のあは雪
春またき寒さや空にのこるらんうす／＼ふれるけふのしらゆき

七夕

契置て稀の逢瀬に今宵しも立なへたてそ天の川霧

織女のあまの羽衣まれにきて猶いく秋のちきりかさねむ

契おくおもひも深き天の川たえぬあふ瀬の末やいく秋

一年にひと夜をちよとたなはたのちきり重ぬる中の手まくら

秋ことに星のちきりやうらなくも雲のころも手重ねきぬらん
淵瀬とはかはらて星のいく秋が契尽せぬあまのかはみつ
いつしかと待し今宵に巡りきて袖のなみたをほし合の空

十五夜

もろ人のわきてそめつる秋のよの空に名たかき月のひかりを
四方に猶も中の月のてり添て光隈なき秋のよのそら

けふといへは待来し秋の中空に「あふくも高き望月の影

菊十首

千年とも猶かきらしな秋ことに咲そふ菊の花の栄えは

山路より根こして爰にさくきくのちとせや花の色に見ゆらむ

咲花にひかりを添て白つゆの玉もてかさる菊のいくむら

うちつけに南の山もうつるかとふりせぬ菊の花の夕はえ

けふといへは色を尽して咲出るまかきの菊の花そめかれぬ

色にめて香にあくかれてくらす哉まかきのきくの花の盛を

契置て猶こそめつれませの内に咲あらふきくの秋の栄えを

露しもおきかふれとも色深き山路の菊の花はふりせず

絵かくともえこそ及はね笛の内にしろきを後の菊のさかりは

咲しより猶いくちよもしめゆふてかこふまかきのきくの花園

万徳寺にて

咲初て日数もいくかふるてらに「ふりせて匂ふ菊の花その
衣手の露のめくみをかさねきて咲そふきくの花そふりせぬ

かたはらの者とも生したてにしをみて

さかつきをけふもうかめて汲や／＼「なかれの末のきくの下水

十三夜

も中より後の日数をかさねきて衣手さむし長月のかけ
隈もなく向ふ物から玉くしけふたよの月の影をしそ思ふ」
長月のなかき夜とても思はれすあかぬこゝろにむかふさやけさ

享和三年癸亥

七夕

いく秋も真砂の数に契おきてよむとも尽し星合のはま

良夜雨ふる

秋も中待れし月は名のみにて光へたつる雨雲そうき

雨雲の隔し空そしのはるゝ」名におふ月の秋のひかりを

やゝ晴たり

さし出る光はいつにかはらしをめつらにむかふ望月のかけ

待付てうき雲はれし秋のよの中月の影そことなる」

庭菊

契置て老せぬ秋の花やみん山路のきくの千世のためしを

十三夜

長月の名にはかよはて秋のよのをしむにあかぬ影のさやけさ」

最中にもおとりやはする秋のよのふたゝひてらす月のかつらは

残菊

冬かけて霜はおけとも咲はなの色こそまされ千よのしらきく

此やとに千とせをしめて冬も猶」さかりふりせぬ花のむらきく

園の菊に人／＼歌よみて付ぬれば

冬ながら籬のきくの数／＼も」言葉の露に匂ひをそゝふ

もろ人の言葉の露に色浅き」まかきの菊の冬も匂へる

神無月廿日はかり海晏寺にて

磯寺のもみち色こき夕かけにくれなぬそゝく袖の浦浪

秋過て冬の日かすもふるてらの」庭に色こき木々のもみち葉
朝夕のしくれに染て薄くこく色をあらそふ寺のもみち葉

文化元年甲子

春のあしたよめる

めなれてし日影もさすかたち返る春のしるしの光をそゝふ
空もはや霞のころもたち初て四方うらゝかに春はきにけり

松契千年 智貞院年賀

いく千歳みとりを添る松かえに猶こそちきれ尽ぬよはひを

おなし題 平岡瀬兵衛

千年とも猶かきらしなみとりそふときはの松に齢ちきりて

緑そふ陰によはひを契おきて」まつもろともに栄えゆかまし

庭松久友 森山源五郎

齡猶ともにかさねて千世経へき色をみきりの松の一もと

松延齡友 大久保出羽守殿頼五十年賀

いろかへぬ友とちきりはいく春も」みとりかさねむ松のことは

春ことにいろこそまされ常はなる松をちとせの友とちきりて

常はなる松こそちよの友ならめふりせぬ君かやとに栄えて

御殿山

春ことにきつゝそめつる此やまのさかり数そふ花のいくもと

はるもやゝ磯山桜咲からに波のうね／＼影そ匂へる

飛鳥山

分きつゝあかすこそみれ真盛の」けふかあすかの山の桜を

鶯 森山源五郎母義三十三回／＼遐遠

めぐり来しみそちみとせのなき跡をなれもとひ来て鶯そなく

梅 おなしく定子にかはりて

うゑ置し人はむかしに年経ても」かはらぬ色に匂ふ梅かゝ

橘 紀州家臣百回遐遠

植しその人のかたみと見れば猶ししのふにあまる軒のたち花

七夕

幾秋も契はたえしほしあひの「さゝのひとよの枕なれとも

またれつる秋はきにけり織女のちきりかさねん天の羽衣

秋ひと夜天の羽ころもまれにきてうらなくちきる星合のそら

秋月 西田金治郎頼

かきりなきひかりを添てむさし野に名も高との「秋のよの月

良夜

秋も中折にふりつゝ雨くものとたへるもうし望月の空

隔つれば猶しのはれつ雨雲の「かゝるも中の月のひかりを

空晴てあかすこそみれ名にしおふ秋もゝ中の月のひかりを

見しまゝのいつにかはらぬ空ならわきて最中の月そさやけき

空晴てさやけき影をみな人の「仰も高きもち月の空

竹内長林かはしめて菊を作れるをみて

ことしより竹のまかきのよゝかけて菜ゆくやとのきくのいくもと

松ならて一よのほとに咲揃ふ「千もとの菊のやとそ賑ふ

菊

千世こめてかこふ籬のきくの花猶いく秋のさかりをやみむ

契置し秋にかはらて庭もせにちよもと匂ふしらすくの花」

咲初てよりいろ／＼にかはりゆくあり

咲かはるかきりもあらていく千枝色かふりせぬ菊の一もと

十三夜

秋もやゝ日かすふり行雲の上に「さやかにうつる長月のかけ

世々にてる光や空になか月のくもらぬためし猶仰みん

望の夜もしのふ計に空はれてふたゝひてらす月のくまなき

あふきみむ二夜の空に消昇る」月のかつらの長きためしを

めかれしな月のかつらも長月のひかりを花とちらすこよひは」

(下巻)

文化二年乙丑

東叡山花見

分きつるあつまの日枝の山桜たゝしら雲の香にそ匂へる」

七夕

契置てまれのあひせる星こよひこちなへたてそ天の河霧

おなしく七首

一とせにひと夜なからもたなはたのちきり尽せぬ秋やいく秋」

ちきりおく思ひも深きあまの川けふの逢瀬に浪な立そね

みなれ棹さして今宵はたなはたの暮待わたるつまむかひふね

星今宵契かはらて大空の名にこそみつれ天の川なみ」

かけまくも手向るいとより／＼にむすふちきりの末そはるけき

秋毎にまくらかはしてたなはたの一夜を千よの契ならまし

たなはたのさらの一よの玉床はいく秋露の契ならまし」

良夜

もろ人のあふたも高き秋の夜に光を添るもち月のかけ

秋こよひ高麗もろこしも隔なくも中の月の影や消らむ

名にしおふ秋の最中は一しほに「ひかりそみつる月の海つら

万隣法師かやとの菊を

浅からぬめくみの露にさき出て匂ひことなる菊のいろ／＼

見てのみも老せぬ秋そしられぬるふりせぬ菊の花のさかりは」

咲出てちとせの末もしらきくの匂ひふりせぬ花のいくもと

仙人のすみかをこゝに咲出て千とせふるてふませの白菊
しら露の玉もてかざる笹の内にいろ／＼きくの匂ひをそゝふ」

後の月

をしむそよまさきのかつら長き夜もふたゝひてらす月のかつらも
もみち葉に猶ちり添て一しほの光さやけき長月の影

名にめてゝ猶照まされ長つきの」かたふく影をゝしむ物から

海晏寺にて

磯遠くうち寄る浪もいく千しほ染てにほへる寺のもみち葉

此ころの時雨のほとそしられける磯山てらのもみち尋て」

夕日かけ山のもみち葉色はえてくれなぬうつる袖か浦なみ

世にたくひあらしの風に散敷て錦とそえる寺のもみち葉」

文化三年丙寅

梅やしきにて

此やとの名におふ梅のいろかをや袖にうつして家つとにせん

亀契万年 井伊掃部頭殿初老賀」

契置てともに齢やかさぬらんみとりの亀のいく万代も

苔のむす岩ねの亀もよろつ代の君かためとや齢かそへむ

よろつよの友とこそみめさられしのなれる岩ねの亀のよはひを」

梅

小簾のひまもり来る梅の薫りこそ猶いく春をかけてしもみめ

こきうすき色をましへて咲出るはなをみきりの梅のいくもと

松添栄色 根岸肥前守七十年賀」

栄えつゝよはひを松の若みとり猶いくちよの色やそはまし

杜若

長き日ももりのしめ繩くり返しあかすそめつる花のしらゆふ

水上花」

咲しより山下水にかけ見えて匂ひもふかき花のいくもと

鶴契齢 奥七十年賀

末遠きよはひをこゝに契おきてよはひかさねむ鶴の毛衣

友に猶よはひちきりていく千とせ」つるの毛ころもかさねきなまし

菖蒲

みたれ散露の玉江のあやめくさけふ刈袖も香に匂ふらし

旅宿暁

ふるさとの夢の余波そをしまるゝ」暁おきの旅のまくらに

故郷恋

中絶ていとゝ思ひもふかくさの里のかよひち野とや成なん

契恋

汲てしれむすふ契のいもせ川」ふかきおもひのその心を

絶久恋

かけて思ふかひこそなけれうき中のたえて幾としふるの高橋

時鳥満山

一こゑをわか面かけと啼すてゝ」けふしもかへる山ほとゝきす

目黒へ詣る道のゆく手に

こゝかしこ色に出つゝ秋もはや稲葉にそよく風そ身にしむ

十五夜

こくふとき光やはある中空に」さやけき月の望の今宵は

ちさとまつ隔はあらし名にしおふも中の月のしるき光は

秋のよもをしむにたらぬ物なれや名にしおふ里の月のひかりに

秋懐旧 森山源五郎頼」

露しくれふりし昔をしのふるは草葉の露も涙とをみむ

ふることをおもひみたれて我袖もなみた露けき萩か花さと

うつりゆくむかしをいまに見る月のかけしのはして袖そぬれそふ」

故郷露

いつしかと秋の日影もふるさとの蓬か軒につゆそおきそふ

初秋風

さやかには吹ともわかつて萩の葉にかよひそめたるけさの秋かせ」

秋夕晴

何ゆゑとこゝろにうきはわかねともまつ袖におく秋のゆふつゆ

野鹿交萩

咲はなのゆかりとめきて棹しかのたちさらす鳴野への萩はら」

暮秋打衣

夜さむそふ秋の日かすも重ねきて冬をとなり衣うつなり

湖眺望

残る日のかけやほのかにうつるらん鳩てる海の浪の遠かた」

名所鶴

こゝに猶ゆきかよひつゝ友鶴のちとせを契る松かうら島

菊

移し植し山路のたねの菊の花猶いく千よの秋や重ねん」

千世こめてむすふ籬に色もかもふりせて匂ふ菊のいくもと

咲しより千歳の末もしら菊は老せぬやとのためしとやみん

ちよふへきためしを今に咲終て山路のきくの匂ひふりせず」

むらきくの咲もかさねて此やとのちとせはしるし花のいろかに

万隣法師か園にあそひて

深からぬ心尽しにいろそき花にちとせの栄え見せつゝ

海晏寺」

みれば猶聞しに増て此寺に染るもみちの色のいくしほ

幾千しほ染こそ尽せ名に高き磯山てらの庭のもみちは

はつ雪

待つて花のみやこの花とてそ」けふふる雪を人のめつらめ

冬恋

恋くさの根はかれやらて冬も猶思ひをたねと生しけるらし」

文化四年丁卯
初春

初春

明初るあしたの空を遠近にまつかすみてや春のみゆらん

一しほのみとりを添て明そむる」はるのあしたの空のゝとけさ

立かへる年もゆたかにあら玉のひかり和らくけさの初春

梅やしきにて

名にしおふ梅の園生の一木より千もとの花の世に匂ふらし」

はる／＼と風をしるへにわけきてそ名高き梅の花あそひする

御殿山

浪よする磯山さくらいとゝなほ匂ひを添る花のちりかた

磯さくら咲にけらしな名にしおふ」袖かうらはの浪薫るまで

和歌三神奉納

あふきみるをしへ尊きことのはの栄えそいのる神のまに／＼

くみてしる神のめくみの末遠き道は尽せし和歌のうら波」

七夕

くみてしれ世々に秋せぬ天の河としに稀なる深きあふ瀬を

月

露むすふ尾はなに月のかけみちて果なくてらすむさしのゝ原」

重陽

くめや／＼齡のふてふきくの酒猶いくちよの栄えちきりて

咲匂ふ花の数／＼めぐりつゝちとせを契る菊の盃

秋毎のきくの下水くみて猶」千世のよはひも契おかまし

目黒詣

露しもの秋の田面をまぢみれば稲葉おしなみいる付にけり

菊

いく秋の契やこめてませの内に「ふりせぬ菊の盛見すらん
此やとのちとせを花の色に出て尽せず匂ふ菊のいくもと

残きく

咲しより日数ふれとも霜に猶老せぬやとの菊のいろ／＼
まのあたり千歳やそれと花にみん冬かけてさく菊のいくもと

歳暮

かそへ来し日かすもいつかけふあすとくれゆく年そをしまれにける
並て世のおのかさま／＼ことしけく「春まつとしの暮そにきほふ
おの（か）し／＼としのわたりのいとまなみ立返り来ん春のいそきに

文化五年戊辰

春のはしめに

さし出る日かけくまなく明そめて春をみとりの空の／＼とけさ
よつの海浪路しつてくたつ春をゆたけき御代のためしとやみん

七十年の齢を人／＼ほき給はりて「寄る詩におくり聞えぬるをりに庭松

契久 柴山持基卿出題

契猶つきぬよはひのためしには十かへる松の花も見えまし
齢猶ともにかさねん千代経へき色をみきりの松にちきりて

人／＼に万して

もろ人の松のここの葉かきあつめ尽ぬよはひの有数にせむ
諸人のふかきめくみは十返りの花も咲へきまつのことの葉

定信ぬしより年ほきの品「かす／＼たまはりしむくひに作り松をつかは

すとしてよみて枝に付ける今年定信ぬしも五十年なりけり

浅からぬ恵みいろそふ春に又君かちとせもいはふ一木そ

返し 白川少将

立なれて我もちとせを契はや君かめくみのまつの一木に

梅やしきにて

春くれて風をしるへに立そよる名におふ梅の盛したふて

春ことにめかれすむかふ梅かゝを袖にうつして家つとにせん

和歌三神奉納

ことのはのめくみかしこき神風にたつや弥生のわかのうら波

七夕

織女のまれのあふ夜やうらなくもちきりかさねむ雲の衣手

十五夜

名にしおふ光や空に満ぬらん秋も最中の月のかつらに

またれ来し日数も秋の中空に「あかすもむかふ月のくまなさ

菊

咲出て千歳の末もしらきくの匂ひふりせぬ花のいくもと

仙人のむかしをいまに咲つきて千とせも経らん露のむら菊

しら露の玉もてかさる笹のうちにいろ／＼きくの咲そかさぬる

九月十三夜

影ふたつ庭のもみちもかつ散てさやかにすめる長月の空

かそへきてあかすそ向ふ中そらに「よをながつきの影のさやけき

名に高き望の顔にもをとらしなふたゝひすめる月のひかりは

初ゆき

待れつるほとは梢に色もなく庭に降しく雪のはつ花

降そめて梢の風もいとふなり雪を花ともめつるものから

文化六年己巳

明初て日影もしるくけさははや「春をみとりの空のしつけさ

空もけさ春しきぬると遠近に霞のころも立そめにけり

あふきみる日影長閑に明初てうこかぬ御代の春のゆたけさ

よつの海静に明てたくひなみ立かへりぬる春のしつけさ

けさははや霞の衣うちそへて空もみとりの春はきにけり

薫雪といふ梅に万して歌よみてをと森山氏の与にまかせて」

ことのはの光を添てさく梅の名も世にかをる雪の白たへ

七夕

浅からぬちきりなからも織女のゆき名立ぬる天の川浪

八月十五夜」

秋のよの最中の月のたくひなみくまなく移る鳩の海つら
うつむかふ心にかゝる隈もなし秋の中月のひかりに
影みちて秋の中萩の上におきまとはせる月のしら露」

菊

咲からに山路のきくのためしをやうつしてこゝにいく秋もへむ

いく秋も尽ぬためしを契らましきりのきくの花の色かに

咲出し花の籬のめもあやに」露もいろそふ菊のいくもと

上屋敷にて

いく秋も花のいろかよちきりおかむ老せぬやとのきくの盛は

千歳経む山路の秋を今爰に移し植にし菊の幾本」

十三夜

もろ人の更行く空やをしむらん夜もなか月の影にめてゝは
仰見むふたゝひてらす秋のよの夜をなが月を御代のためしに
名にしおふ最中の後も玉くしけ」ふたゝひ照すむさしのゝ月
長月のつきのかつらのもみちして猶一しほにてりまさるかけ

文化七年庚午」

春のはしめによめる

見し俣の目影なからも立かへりけふあら玉の光りのとけむ
立返る春をみきりの松にしも今一しほのみとりをそゝふ

梅やしきにて」

春ことに群つゝ人のきさらきや名におふ梅の匂ひめかれす

五十年賀

十かへりの花に契て今年よりつきせぬはるを松のことは

八十年賀 堀田相模守殿母義」

此はるを重ぬる千よのはしめにてうらゝに立る鶴の毛衣

文月七日

かす袖も露のちきりにほし合のあくるわひしききぬ／＼の空
あさからぬ中の逢せもたなはたの」たらぬちきりの天の川水
いつの秋むすひ初けん棚はたのねかひのいと長きちきりを

良夜

秋今宵くまなく晴て月影もみつの浦はそ忍はれにける」

かきりなくさやけかりけりむさしのゝ空にみちぬる月のかつらは

折ふし雨ふり出

おもひはらすかたこそなけれ秋のよの中月の月にかゝる雨雲

菊」

朝な／＼おきそふ露に色そひてふりせず匂ふ菊のいくもと

いく秋も栄えむ末もしられる老せぬきくの花の色かに

いつしかとうつろふ秋の露しもにふりせて匂ふしらきくの花」

末遠き山路をこゝにみきりなる菊にちとせの秋やちきらむ

仙人の住かをこゝにうつしみん籬のきくの花のちとせに

上の館にて

籬のうちに千年をしめて咲きくの」花にふりせぬ色そ見えける

九月十三夜

うち向ふよも長月の空なからをしむにあかぬ影のさやけさ
名にしをふも中の秋にくらふ山かひあるよはの長月のかけ」
中空の雲吹払ふ風ならて月の名残の見にそしみぬる

松契千年 大久保佐渡守殿隠居／七十年賀

末遠き松の梢ともろともに千よのとちとや契おくらし」

文化八年辛未

松延年友 南沢高之丞母富勢／六十一年賀

春ことにみとり色そふ十返りの花さく世をやともにまつらむ

和歌三神奉納」

むかしいまをしへをあふくことの葉の恵みかしこき三はしらの神

御殿山

帆のかけのほのかに見えて芝の海の沖にかすくうかふ友ふね

吾づまの日枝にて」

色深くわけ入山のはつさくら道のしりへを花にまかせて

山さくら日かけもくもるとはかりに咲かさねたる花のしら雲

しのはつの池の鏡にうつろふも散かたとをしむ山さくら花」

七日のゆふへ

幾秋のちきりは尽し棚はたのさゝのひと夜もよゝを重ねて

めぐり来し秋のこよひやたなはたのちきりかさねむ雲の衣手

つまむかふけふの今宵や立琴の」ちすちの糸の思ひみたらん

虫すらもつゝれさせよと野に鳴て星の手向のいともにきはし

うらなくも契置てし棚はたのあまの羽衣今宵重ねむ

ゆく末の逢瀬は尽し天の河」ふかきいもせの秋に契て

めぐりあふ星にねかひのいと車くりかへしつゝいさや手向ん

新造やゝ成て二代子のわたましせるとてわか館をたちわかるるに

よみて送るふみ月」朔日なりけり

立返る秋にならひて星の松かはらぬ色に八千代経なゝむ

はし時に藤の花の秋としもなく咲ぬるを瓶にさせりける有常はなる松

にまつひかゝりて」ともにちとせをも経ぬへき物から何くれと思ひよ

せ侍りてよみておくる

たつ秋にふたゝひ咲る藤のはなかへる浪ともいふへかりけり

良夜」

めかれしな待えし秋の中空に名高き月の消るかきりは

いつはあれと秋の最中はわきて猶照そふ月の影のきよらさ

くもりなき御代のためしかむさし野の秋のこよひの月のかゝみは」

名にしおふ秋の中の池水にてる月なみのかけの静さ

十五夜雨ふり来

雨雲に秋の最中はおほはれて琴酒のみの月のおもかけ

名に高き秋のこよひの中空に」雨雲はうし望月のかけ

幾久

いく秋の盛を花のいろに出てふりせず匂ふ庭のしら菊

ことしより山路の菊を移し植て花にちとせの秋やちきらん」

やまひとのためしをこゝに千年ふる花をみきりの菊のいくもと

咲花にひかりを添てしら露の玉をかされる庭のむら菊

さき初る籬の菊に契おきて猶いく秋も人は老せし」

寺菊

うつし植て秋もいく秋ふるてらのまかきに匂ふ菊のいろく

残菊

冬懸ていろかも深くさくきくのふりせぬ秋に盛見すらん」

歳暮

かくまでも老にけらしな露霜に日数もつもとしの暮かた

かそへ来て身につむ老と知なから又たちかへる春そまたるゝ

ほとちかき春のいそきにことしけく」栄ゆくやとの暮そ賑ふ

いつしかと積る日数をしまるゝくれゆく年に閑守もなく

かそふれはいつしか春を松の葉に年はいく日もあらしふくなり」

文化九年壬申

春のはしめのうた

よつての海浪もしつかにあけ初てゆたかにむかふ君か代の春
庭梅」

春さむみのこれる雪のそれならて白たへ匂ふ梅のひとつもと
玉たれの小簾もまぢかく咲はなのいく春かけて匂ふ梅かな
春のはしめ雪の降けるに

春立し日数とゝもにふりつみて」白たへさむき庭のあは雪
春なからまた見ぬ花の面かけをはらふもをしき木々のあは雪
葉かへせぬ枝にかゝれるしら雪は十返る松の花とこそみれ
御殿山にあそひて」

春ふかく咲かさねたる山さくら袖かうら風吹なさをひそ

来福寺にて

山桜さきこそみつれもろ人の顔さへにける花のしたかけ

新日くらしにあそひて」

庭の面のさくらのもとを仮初のやとにしめつゝ花衣きん

六十年賀 恩田木工妻

齡猶ならひか岡のまつか枝は千世には千代の春や重む

卯月はしめに」

待つて卯月の空に一こゑを聞もめつらし山雀公鳥

七月七日

契おきて千とせの秋も棚はたのいもせかはらぬ天の中川

幾秋の深き思ひにこかれきて」こよひあふらんあまの川船

秋今宵ねかひのいとの一筋に棚はたつめや待わふるらん

つらき名の千よになかれて秋毎にちきりたえせぬ天の川水

遠藤但馬守との祖千葉介と常胤の後中勢徳胤行建久の軍功によりて美濃

国郡上に住し中の院大納言為家卿の女をむかへて歌人のよし今年五百

年の遠忌に芝山前中納言持基卿出題にて思往事てふ」事を人／＼に与

詠せ取重ね給ふによみてつかはす

五百年のむかしを峯の紅葉してことのはにしのお秋山

柳沢信濃守との日野家より此度伝授事有しよしにて」寄道祝てふ題を

敷しまのをしへかしく伝へきて猶末遠きよ道そつきせぬ

末広きをしへを四方に敷しまの道のさかえを尚や仰かん

たえず猶世々を重ねてすなほなる」をしへにしけることのはのみち

寄亀祝 石川将監忠房母義／七十年賀

契置て猶尽せしなよろつ代もすむてふ池の亀のよはひに

けふよりや老の齡にちきらなん亀の尾山のいく万代も」

良夜

わきて猶秋の最中の名に高き三笠の山に照る月かけ

置露も秋の中の名にしおふひかりはてなきむさしのゝ原

年ことに盃取て秋最中」かはらぬ月の影をこそくめ

菊

秋毎に千とせをこめて庭の面に咲そふきくの花そ色こき

九月十三夜

遠近の野はうら枯て隈もなく」ふたよの月野かけそ静けき

長月のなかきよるすからおきあてもさやけき影にをしまれにける

十日あまり三よやと計空晴て秋の名こりの月そさやけき

長月のつきのかつらのもみちせる」ひかりや今宵花とこそちれ

望のよにおとりやはする影たかきくらふの山の月のなこりは

塵もすはんはかりさやけし玉くしけふたひてらす月の光りは

なとてかくなかき夜すから長月の」をしむかひなく山に入らん

残れる菊を

冬かけてふりせぬ色のいちしるく咲て匂へるむらきくの花」

文化十年癸酉

春のはしめに

くもりなき御代のためしのいちしるくはるたつけきの空の長閑さ
年毎にいく代かはらぬ松たてゝ「みどりの春をむかふたのしき
さかつきにけさは霞をくみ初てむかふいく世の春やかさねむ

黒田円諦院との七十年の賀に洲浜に浦島の子の釣するかたをすゑ
て添けるうた」

龍の宮にち世を経にし古へのためしや末の齡ならまし

藤

十返りの松もろともに咲はなのいく春かけて匂ふふちなみ

つゝし」

咲出てそれとみきりの岩つゝしいはても花の色にこかるゝ

時鳥

一こゑはそこともわかす此朝けたゝよふ雲になくほとゝきす

更衣」

をしまれし花そめ衣ぬきかへてうすきたもとに夏はきにけり

あやめ

いにしへのためしかれせてあやめくさ長き根さしを契ることのは

七夕」

文月をくり返しつゝ秋ことに一夜をほしの待やわふらん

逢ことは一よなからも織女の幾秋わたる天の河ふね

朝顔

時のまのはなに心をおく露の」むすひもあへぬ垣の朝かほ

十五夜

年毎にかはらぬ秋のこよひしもめつらにむかふ望月のかけ

めかれしなたくひもさらに中空のさやく向ふ月のひかりは」

名に高き秋もゝ中の中そらに夜わたる月の影のさやけさ

菊

露しけき秋もいく秋咲つきてとこしなへなるむら菊の花

仙人の老せぬ秋のあとゝめて」盛ひさしき菊の花園

十三夜

長き夜も猶こそをしめかくて又ふたゝてらす月のかつらは

仰みん最中の後もあきらけきよゝにてりそふ月のみやこを」

名にしおふ月のかつらもなな月のいく秋かけてもみちするらん

七十年賀

千世もたる松竹のみか年のうちにひらくる梅もたくひとは見よ

としのはてに」

つもり来し年の日数も呉竹のひと夜そはるの隔なりける

ほとちかき春のまうけの神わさもかはらぬとしの暮そ賑ふ」

文化十一年甲戌

はるのはしめ

立返る春のひかりもたくひなみゆたかにむかふ四方の海つら

十返りの花さく春といひてまし」あけゆくやとの松のしら雪

七十年驚 伊東伝吾母

十かへりの花に契て今年よりさかゆく末をまつのことは

関鶯

鶯ものどけき春にあふさかの」関の杉むら木かくれて啼

里杜鵑

声たえぬ皐月の雨のほとゝきすしのふの里は名のみ計に

たなはた

まちわたるけふの今宵はうき雲も」身のたくひなり天の河はらに

星こよひねかひのいとの一筋にかけてそ仰く中の契を

たなはたの年の逢瀬は秋せぬを立もへたつる天の川ふね

旅宿月 井上河内守殿頼」

ゆき暮てやとかりそめの旅まくら月の名残そをしまれにける

菊

しら露のおきまとはせる色／＼に咲るまかきの菊のいくもと
八重ひとへ色をましへて咲菊は」にしき織かくゆふへとやみん
いく秋も老せぬ花ときくからにちとせの友と契てやみん
此ほとは朝な夕なに置そふる露も色なるむらきくの花」

文化十二年乙亥

立春

たつはるの空もみとりに明そめて千とせの末をまつのことふき
明初て心にかゝるくまもなし」みそらや花の春の光りは

寄若葉祝 恩田木工七十年賀

みとりそふ竹のかたるにことしより年もわかれもつみやかさねむ
瀬崎のねかひにかさせて

深みとり若枝もことにさし添て」栄えつきせぬやとの松か枝

七夕衣

またれ来し年にひと夜の恋衣うらなくちきる星合の空

七夕河

いつよりかたえぬ契の浅からず」あまの川なみ名にや立らん

七夕霧

またれつるけふのこよひのうき中を立なへたてそ天の河きり

七夕鳥

けふといへは翅かさねて星合の」あふせまつらんかさゝきの橋

七夕契

たなはたの雲の衣手秋のきてまれの逢瀬の契かさねむ

七夕舟

秋こよひこかれ／＼てあまのかは」あふせ嬉しきつまむかひふね

七夕枕

たなはたのちきりもかたき岩まくらかはす一よも苔のむすまで」

【跋文】

年ことにをりにふれつゝよみすて給へる御歌おふけなくもおのれ清酒にま
かせおき給ひて数つもりぬれはかい写し一卷二巻となしつゝ御もとに奉り
ぬ猶寛政の七年よりこなたのもみなあつかり置奉りて既に」またかい改むへ
きほとの数つもりぬれは凡さる心かまひもなしおける物から去年の葉月い
くりなくも (三分ノ一行アキ)

仰ことさへ(アキ)御記念となりにて侍れはかしこくもつかへ奉るいとま／

＼かい付書となしてさゝけ奉りぬ」化十三年卯月 清酒謹言

【付記】

幸弘文芸活動に関する主な論文には次のものがある。

①『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に關
する研究 論一篇・資料篇 第一部』(平成一七年度～平成一九年度科
学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書・研究代表者井上敏幸、
平成二〇年三月)

②玉城司「松代藩第六代藩主真田幸弘の文藝―漢詩・和歌・俳諧―」
(『和漢比較文芸』第46号、平成二三年一二月)

③平林香織「松代藩主・真田幸弘の文芸活動―和歌と俳諧―」(『錦
仁編』中世詩歌の本質と展開)竹林舎、平成二四年四月)

④伊藤善隆「真田幸弘と大名俳諧」(『文人大名真田幸弘とその時代』
真田宝物館図録、平成二四年九月)

⑤平林香織「松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧活動について―安
永年間を中心として」(『松代』二〇号、平成二五年三月)

【謝辞】

資料の閲覧及び翻刻に際して松代文化財施設管理事務所(真田宝物館)のご高配を賜った。心から御礼申し上げます。